

# 後藤新平の「青春」

鶴見祐輔著

『正伝 後藤新平』(全八巻、藤原書店)

を読んでいる。一巻が八〇〇、九〇〇頁にわたり、新平の人生、思想、建議、政策のすべてが、時に壮大に時に細密に描かれた正伝の白眉である。祐輔は新平の女婿であり、新平を公私ともどもに支え、新平の立ち居振る舞いを觀察できる絶好の位置にいた。内務省衛生局長、台灣總督府民政長官、初代満鉄總裁、内務大臣、外務大臣、東京市長、再度の内務大臣、一時は宰相に手が届くまでにいたるという煌びやかな政治的人生を送った人物が新平である。

しかし、正伝の全巻を読了して、新平の長い人生

における「青春」は、台灣總督府民政長官の八年余であつたことに氣付かされている。台灣總督府を経て満鉄總裁に就任して以来の新平の文章には、台灣時代には輝いていたような光彩が失せ、政治的地位は次々と上昇していく一方で、軍部や官僚や閥僚に対する不平不満、時に愚痴めいた話が次第に増えてくる。後藤の志操が高く、その志操と現実、明治も

末年にいたる頃にはすでに牢固として築き上げられ

渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)

一九三九年 山梨県生まれ。七年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

た既得権益に、新平の建議のことごとくが跳ね返されてしまつたのである。後藤の後半生は、表面からは窺い知れない「失意」の人生だったのではないか。台灣時代が新平の青春であった。第四代台灣總督の児玉源太郎という権力と権威において比類なき軍人の厚い信頼に支えられ、しかも帝國憲法や帝國議会の制約から離れて、フロンティア台灣の白いキャンバスの上に、新平年来の思想「生物学の原理」にもとづく土匪招降策、阿片漸禁政策、旧慣調査と土地制度改革、衛生事業、インフラ建設事業などを次々と展開できたのである。台灣近代化の基盤形成は新平の思想と政策によって幕が切って降ろされたといつていい。それら事業のための人材抜擢、抜擢された人間への満幅の信頼、信頼に応える技術者、官僚の新平への献身が、台灣統治成功の源泉であつたといつても過言ではない。政治指導者のリーダーシップとは何か。永遠に語られて然るべきテーマだが、新平の台灣時代はその原型を提供しているよう